

報告要旨

国際経済学会第62回全国大会 自由論題

大東文化大学 馬場宏二

題名：比較生産費の両端

マルクス経済学の立場から比較生産費説の再考察を試みる。自分に比較優位のある主題ではないが、このところ、ヘンリ・マ・チン説の存在はじめ、いくつかの目新しい論点に気付いたので、敢えて報告を買って出た。

題意は、中央にリカ・ド『経済学及び課税の原理』第七章前段のいわゆる比較生産費説を据え、そして主に、そこに至る前史とその後の継承・展開を考察する、と言うことである。特に、前史の先端がマ・チン説なのでその紹介を前端とし、マルクスによる継承が、比較生産費説自体についてもマ・チンの業績についても、極めてまずいところを残しているため、その訂正を後端とする。

．前史

A．アダム・スミス

『国富論』がリカ・ド経済学の先駆であることは周知であるが、スミスの貿易論が比較生産費・貿易利益説を含み、リカ・ド貿易論の直接の先行者となったことは、通常さほど意識されていない。そこでまず、スミスの先駆性を確認する。

同時に、スミスの貿易論が、有名な「見えざる手」の一環であることから、「見えざる手」自体について、スミスは「神の見えざる手」と言ったことはなく、むしろ意識的に「神」を付けなかった。近年若手に不注意による過ちが拡大再生産されているので、この点に注意を喚起する。

スミスとマ・チンの継承関係には確証がない。ペティ マ・チン スミスとなる古典派経済学の系圖を描きたいが物証を見出せない。ペティ カンティヨン スミスの系圖の方がまだ描きやすい。

B．ヘンリ・マ・チン(文献B-1、B-2)

この無署名の冊子は、形式上は政策論争文であるが、理論的には驚くべき水準の内容を多々含み、「ペティとスミスの間の知られざる傑作」と評して良い。その一部に比較生産費説的な国際分業論がある。冊子自体の歴史がそうとう錯綜しているため、なるだけ整理して紹介する。

理論内容：生産過程論・剰余価値論、自由貿易論、特に比較生産費説

書誌学：著者、初版と再版、マカロックによる選集版(B-4)

認知の歴史：マカロック(B-4、B-5)、マルクス(C-3)、マントウ(C-6)、ト・マス(B-6)、ウ”アイナ-(B-7、B-8)・シュムペ-タ-(C-7)、マクラウド(B-9)、ハチスン(B-10)とア-ウィン(C-8) 久保芳和(A-4)

* 補足的にI・ジャ-ウ”エ-ズ 文献(B-3)

ウ”アイナ-が発掘に関わったため、マ・チンよりかえって有名くらいだが、理論的な到達度は比較にならない。ただ、国際自動調節作用論の先駆と読み込むことは可能なため、リカ・ドの第七章の前段の先駆をマ・チン、後段の先駆をこの作品と割り振るのは一興であろう。

．リカ・ド『原理』7章の前半と後半

A．7章前半...ここは詳説しない。6章までの投下労働価値説が、生産要素の通過が困難な国境の壁に突き当たって限界を示す。それを乗り越えるのが、投下労働量の複比的関係を利用した比較生産費説である。

B．7章後半 通常為替論と解されるが、実は、国際均衡を含む全世界的均衡が、投下労働価値説的労働配分によって行なわれることを、極限まで探索した理論とも解し得る。労働価値説の試みの究極とも呼べる。

因にその論理以下の如し

国際貿易均衡 貿易財の生産性上昇 貿易不均衡 為替プレミアム 金現送 出超国の物価上昇 vs 入超国の物価下落 貿易変化 国際均衡

リカ - ド最大の問題は、機械的貨幣数量説であるとの解釈の余地を残したことである。金流出が物価下落、金流入が物価上昇を齎すこと自体は否定できない。但し貨幣量と物価は正比例的には対応せず、且つ上昇と下降は明確な対称性を持たない。リカ - ドになかった信用論・景気循環論を導入すれば、機械論的自動調節作用論は避けられるが、循環貫通的な国際物価差の発生についてはなお考究すべき問題が残る。

C．ミルの貢献

比較生産費、貿易利益、国際価値、交易条件といった今日の基本用語はおそらくミルの貢献である。通常ミルの貢献と言われる相互需要説は、もともと父ミルのアイデアを子ミルが精緻化したもので、不確定になるのは国際分業の結果生産性が上がるという動態的關係を比較生産費という静態的關係に押し込んだ結果であろう。ただし、ここから近代経済学の継承へ言及する意図はない。

．マルクス経済学と比較生産費説

A．マルクスの不感応

リカ - ドをあれだけ研究したマルクスが、比較生産費説については全く何も語らず、『資本論』第20章の労働強度説や『剰余価値学説史』第20章の国際不等価交換説といった素朴な価値粒子説的国際価値論の断片を残すに留まった。不思議であり、学説史上の不幸である。

比較生産費への無理解と、マカロック排撃とが相い埃って、マルクスはマ - チンの再版を高く評価しながら初版名を逸し、且つ評価不足に終わった。

マルクスが取り上げようとした問題は、実はリカ - ドが基本的に解決していた。先進・後進国間で、貿易を通じて物価体系格差と物価水準の差が生じることを捉えれば良いのである。先進国では、先進産業は高生産性のため割安となり輸出競争力を持つが、有機的構成の低い在来産業は名目労賃が高いと生産物が割高になり、輸入に依存することになる。...これに、ル - イス・ポイントを越えれば実質労賃も上昇すると付け加えれば、生産要素が越えられない国境の壁を粒子説的労働価値説で無理矢理突破しなくとも済む。

B．不生産的継承

マルクス自身に、比較生産費説に対する無理解と関連する、価値粒子説的国際価値論志向と、金価値を産金労働量に固定させる解釈に導く傾向があった。自らマルクス主義のつもりでこの拙劣な要素を継承すると、不毛で時に滑稽な「理論」になる。価値粒子説的国際価値論が価値論として誤りであるばかりではない。金の価値が国際的に同一だという命題にあまりに固執すると戯画になる。

金は古来からのストックがあり、新産金も大部分ストックになる。消費されるのは鑄貨・金製品中の極く一部の摩滅部分に過ぎない。こうした特殊な商品の価値について、一般に商品価値が消費を補填する生産の繰り返しの中で定まるとする投下労働価値説がどこまで適用可能かを反省すべきである。マルクス自身、貨幣価値や労賃の国際的不統一を述べているし、かつて産金労働が十分支払われたことがあるかとの疑問も呈していた。

B．岩田世界資本主義論による復活

宇野学派でも比較生産費説は公的に議論されなかった。宇野自身は理解を示していたのだが、積極的に論じたことはない。ただ、門下の岩田弘による世界資本主義論の根底が、貿易を通じた剰余価値率の上昇、つまり国際分業による資本蓄積の加速である。比較生産費説は、これで辛うじてマルクス学派にも復活した。

文献一覧

A 馬場 関連文献

- 1 『資本論』の一文献 大東文化大学経済研究所 2002年9月
- 2 「ヘンリ・マ・チンの経済学」 同研究所 2003年5月
- 3 「覚書「見えざる手」」大東文化大学『経済研究』 No.13
上掲1と3、『マルクス経済学の活き方』2003年御茶ノ水書房 所収
- 4 久保芳和『東印度貿易に関する諸考察』にあらはれた匿名者の経済思想」大阪商大『経済学雑誌』21-4/5 1049年11月
- 5 『世界経済 基軸と周辺』1972年東京大学出版会 第二章
- 6 『新資本主義論』名古屋大学出版会 1997年 第六章

B 英文

1. anonymous, Considerations upon the East-India trade in tant as brevi creverant opes , seu maritimis seu terrestribus fructibus seu multinidus incremento , seu sanctitate diciplinae, London, A. & J. Churchill 1701
2. anonymous, Advantages of East-India Trade to England; Wherein all the objections to that Trade With relation, 1. To the Exportation of Bullion for Manufacture consumed in England, 2. To the Loss of Employment for our own Hands , 3. to the Abatements of Rents: Are Fully ANSWERED, With a comparison of the EAST-INDIA and FISHING TRADE , London, Roberts 1720
3. Isaac Gervaise, The System or the Theory of the Trade of the World trade, London, Roberts, 1720
4. J.R. McCulloch, The Literature of political economy a classified catalogue, select publications of that science with Historical Critical and Biographical Notes London, Longman, Brown, Green and Longmans, 1845
5. J.R. McCulloch ed., A Select collection of Early English Tracts on Commerce, Printed for the POLITICAL ECONOMY CLUB, 1856
6. P.J. Thomas, Mercantilism and the East-India Trade, 1926
7. J. Viner, "English Theories of Foreign Trade before Adam Smith " in Journal of Political Economy, August 1930
8. J. Viner, Studies of the Theory of International Trade, 1937
9. C. McLeod, Henry Martin and the authorship of 'Considerations upon the East-India Trade ' in Bulletin of the Institute of Historical Reserch, vol. LVI, 1983
10. Terence Hutchison, Before Adam Smith, Basil Blackwell , 1988

C . 翻訳

- 1 . アダム・スミス、『諸国民の富』、大内・松川訳 岩波文庫
同 『国富論』、杉山・水田訳 岩波文庫
- 2 . リカ・ドウ、竹内謙二訳『経済学および課税の原理』東京大学出版会
- 3 . マルクス『資本論』 国民文庫版
- 4 . J . S . ミル、『経済学原理』、末永訳、岩波文庫
- 5 . ジェ - ムス・ミル、渡辺輝雄訳『経済学綱要』、1948年 春秋社
- 6 . ポ - ル・マントウ、徳増・井上・遠藤訳『産業革命』1964年東洋経済
- 7 . シュムペ - タ - 、東畑精一訳『経済分析の歴史2』岩波書店
- 8 . ア - ウィン、小島清監修・麻田四郎訳『自由貿易理論史』1999年